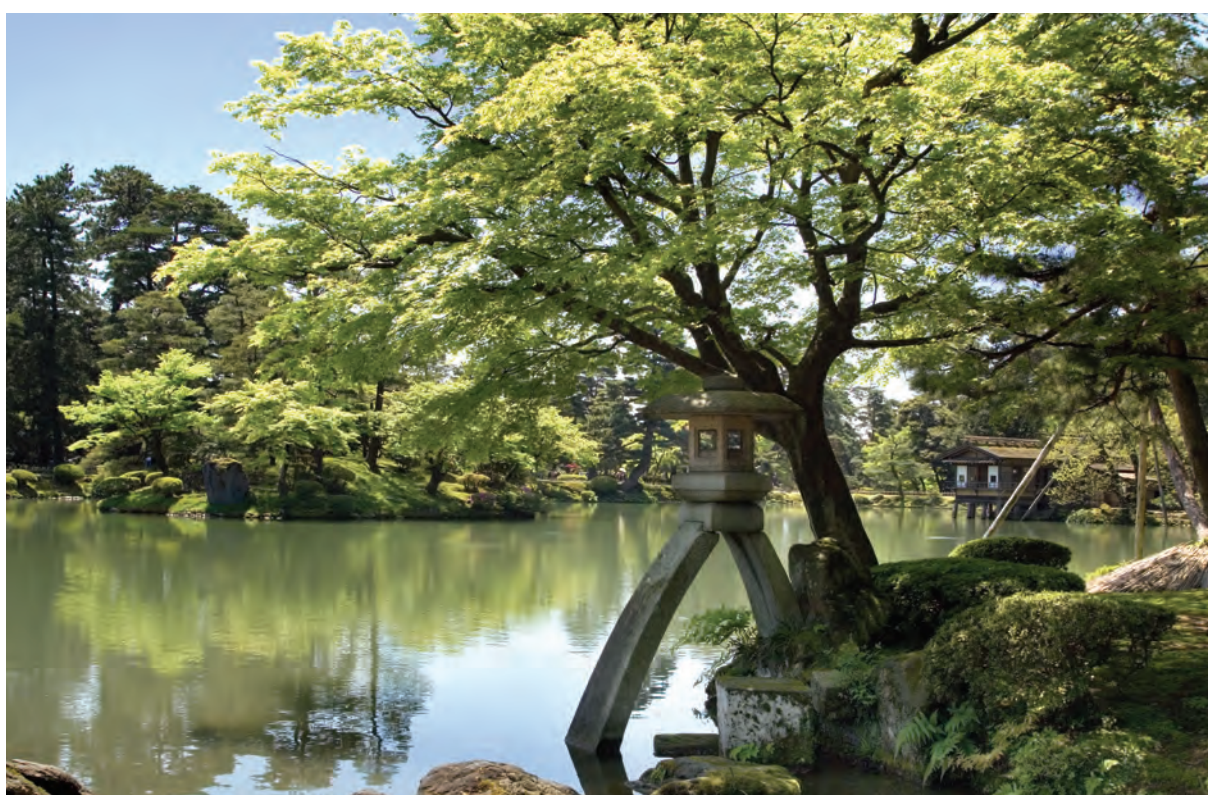


はじめに

金沢は、人口45万人の人的規模の都市であり、旧市街地を中心に黒光りする屋根瓦の続く落ちついた家並み、伝統芸能や伝統工芸を育む生活文化の営み、市内を流れる犀川と浅野川の二条の清流と緑濃い周辺の間々々に囲まれた豊かな自然環境に恵まれるとともに、文化と経済のバランスの取れた、持続可能な創造都市としての評価を受けている。

例えば、創造都市論の世界的リーダーであるチャールズ・ランドリーはその著書『創造都市』日本語版序文において、金沢をボローニャやモントリオールと並ぶ日本の創造都市のモデルであると述べており、また、2008年3月には、日本の文化庁が新たに設置した「文化芸術創造都市」に選定され、文化庁長官が金沢市を表彰しており、日本の創造都市の代表であると言っても過言ではない。

美しい金沢の四季





このように、金沢市が内外から創造都市として評価される理由は、20世紀末に、古くなった紡績工場の煉瓦造りの倉庫を「1日24時間、1年365日」市民が自由に芸術活動に使える画期的な参加型文化施設である「金沢市民芸術村」に再生して話題を集め、21世紀初頭には、自らのアイデンティティである伝統文化の壁に挑戦しつつ都心に現代アートを中心とした「金沢21世紀美術館」を創出して、新世紀にふさわしい市民文化を創造しようとし、さらには21世紀の世界の都市のあり方を探求し、都市政策の実験の場を提供しようという新しいタイプの国際会議である「金沢創造都市(金沢ラウンド)会議」を提唱するなど、革新的な政策を次々に展開してきたからである。



金沢市民芸術村



金沢21世紀美術館

しかし、創造都市・金沢は21世紀に突如として出現したのではない。歴史的、持続的に文化と経済が相互に浸透しながら金沢固有の「文化的生産システム」が形作られてきたのである。

金沢市の起源は1583年に、戦国武将の前田利家がこの地域を支配し、金沢城を中心とする城下町を開いたことによる。前田藩は、江戸幕府に次ぐ所領を擁したが、武力で対抗する道を捨て、学術文化を奨励した。以来、420年余にわたって大きな災害に遭うことなく、また、第二次世界大戦が終戦して間もない1945年10月には、今年で64回目を迎える石川県内最大規模の公募展「現代美術展」の第一回展が、「美術文化の向上による新日本建設への寄与」を掲げて開催されているように、国内でも数少ない非戦災都市としての責務を自認し、これまで平和のうちに経過したことが、伝統的な文化やまちなみ景観、生活様式とともに、類まれな工芸が発展し、保存、継承されることにつながった。

加賀友禅や金箔工芸などに代表される美術工芸は、創造者である工芸作家と職人、そして消費者である武士や町衆、市民によって長い歴史の中で洗練され、独自の様式を発展させた。こうして金沢は日本を代表する伝統的工芸都市としての輝かしい地位を誇るようになった。

さらに金沢は、明治維新以後の近代化の過程において、繊維産業や機械工業を軸とする独自の産業革命を成し遂げ、職人氣質と近代技術を融合させた新たな工芸を生み出すことも怠らなかった。例えば、ユニークな外観で建築としても世界的な注目を集める金沢21世紀美術館は、伝統工芸と先端的なアートとの融合を試み、創造性豊かな人材養成の拠点としても機能し始めている。伝統に革新の営みを加えなければ、単なる「伝承」に墮してしまう。学術文化が経済に刺激を与え、付加価値を高め、発展した経済がまた学術文化を支えるという、文化と産業の連環によって金沢というまちがつくられており、金沢にとっての工芸は、独自文化の結晶であると同時に、経済を支え、まちを発展させる原動力として捉えることができるのである。また、将来にわたり、本市の総合的な都市づくりの指針である「金沢世界都市構想」において、絶えず革新への営みを心がけていくことを市政の根幹としており、金沢は、まさに創造都市の理念に合致した挑戦を実践してきた都市であるという自負がある。

今般、金沢市は21世紀の都市像としての創造都市の重要性を認識し、平和のうちに文化を育むことを体現し、工芸が日常生活の中に根付き保存・継承されてきたとともに、文化と産業が連環することでまちが発展してきた経験や、独自の創造都市政策の実績をもとに、ユネスコ創造都市ネットワークのクラフト都市としての登録をめざし、グローバルネットワークの一員として、文化的多様性の実現と世界平和に、積極的な貢献を図ることを期すものである。